# また一つ歳を重ねる

今日 9 月 17 日で「74」になる。とくに感慨もないが、ここまでよく生きてこられたと思う。戦後まもなく生まれ、病気の連続だったらしい。近所の医師から、「この子は 10 歳まで生きられるか？」と何回も宣告されたと、何回も母から聞かされた。写真は手元に残る元気になってきた頃。手足は細いが、頭でっかちであった。性格的には、「明」という名のとおり明るい性格であった。

年齢が上がるにつれ、吃音や身体のことなどで、生きることが苦しくなることもあったが、なんとか生き延びてきた。こんな私が 74 年も生きつづけて、毎日のように図書館などに通い、すこしだけ社会的な活動にも参加している。自分でも不思議な感じがする。

60 歳のとき卒業生やゼミ生らが「還暦を祝う会」をやってくれ、「かんげき」した。それから 5 年後には、35 年勤めた教員生活からリタイアした。5 年ほど前、名古屋から大阪に転居して、現在に至っている。名古屋で生まれ育ち、飛騨高山や郡上八幡で中学・高校生活。大学は信州松本、そして浪人から大学院は大阪、名古屋で就職して、再び大阪に舞い戻ってきた人生。

65 歳から「前期高齢者」、75 歳からは「後期高齢者」になるという。75 歳で健康保険も変わってしまう。74 歳は「前期高齢者」の最後にあたるわけだ。これから、どのように生きていくか。

できれば 90 歳を過ぎても、宮本憲一先生のように調査や講演などをしていきたいものだ。でも、コロナ禍の影響もあり、歩くことが少なくなり、足腰が弱ってきた。長年にわたり、腰痛に悩まされてきたが、加齢も加わり調子が良くない。

もうひとつ心配なのが目である。退職前後に網膜を患ったが、いまは緑内障の治療をつづけている。治療といっても、月に 1 回検査をして、眼圧を下げるために朝晩きちんと点眼しているだけであるが。つい体調のことに触れたが、精神的な面では名古屋時代より積極的になり、「やる気」いっぱいである。

写真は大阪 IR カジノ誘致に対する住民監査請求「陳述」の朝、大阪市役所前でのインタビュー。「大阪市に底なしの負担がかかる。市民として黙っておれない」と。大阪市の対応に腹が立ち、夢洲 IR 差止住民訴訟の原告の一人として活動することになった。

長年にわたって地方財政と公共事業を研究してきたので、夢洲での無謀な開発を見過ごすことができなかった。原告になるか迷ったが、「前期高齢者」最後の活動として決断した。来月 18 日には、大阪地裁で第 1 回口頭弁論が予定されている。

（2022 年 9 月 17 日）